「少女鬼畜調教列車」
★ぶっかけ夏編
★オナニーシャン
★ギロロにおしっ
★ウンコおもらし
★みんなにレイプ
★二穴同時攻め夏編
なつ母ーのマ
★フェラ奉仕夏編
★ギロロに処女喪失夏編
★バック攻め夏編
★ギロロにアナル処女喪失夏編
2つの723がセットになった
夏み姦セット

ビュビュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ
ドピュ

オナニージャンキーなつみちゃん

今日もペットボトルで
オナニー三昧！

あん！あふ
はひぃ！

きっきもちイイ！

ボポ
ビッ
ビッ
ビッ

なつみちゃんの
お気に入り

クルル特製バイブ
「一撃まん○バスター」

あひゃあ！

ブブブブブブブブ

ぢゅ！ びゅるる！

あら？ギロロこんな所で何してるの？

なっ！なつみ？！

ノゾキなんて最低ねっ！
罰として私のオシッコ攻撃よっ！
なつみのオシッコ・・・
暖かいナリ・・・
ジョボボボボ
ビチョビチョ

やだ・・・
またのぞいてる・・
でも・・・もう我慢・・・
出来ない
もっもれちゃうー！
ビクッ
ビクッ
「なつなつみ・・・」
ハァハァ

いやあああ！
見ないでええええ！
なつみのウンコお！
ひやあがああ！
こっこれがなつみの排泄かっ！
ブバブリブリブリブリブリブリブリブリ
ハアハアハア
ボトボトボトボトボトボトボトボト

「コイツは宇宙人に味方する裏切り者だっ！」
「好きなだけ犯してイイぞ！」
びゅん！
やっ！やめてえ！
痛っ！たすけて！
「このマ○コ気持ちいい！」
「へへへ！汁まみれにしてやる！」
びん！
びん！びん！
びん！びん！
ズボズボ
ゴボゴボ

「中出ししたらもらしてやんの！」
ドピュッ
ドピュンドピュン
ハァハァ
あふうんくっ
ひゃあはひぃ！
ハァハァ
ビュプピュ
ドピュピュ
ピュピュピュピュ
ドロドロ
ジョボジョボ
チョロチョロ
「遠慮せずもっとやれ！」

「前と後の三穴同時攻めだ！」
「さすがに悲鳴を上げてるぞ」
「身体の中を汁でパンパンにしてやれ！」
ギャア
アガ
じぬぅ！死んじゃう！
へぎゃあ！やめへぇ！
ズブズブ
ズボズボッ

「だいぶフェラがうまくなったであります」
「そろそろ宇宙慰安婦として売り出すであります」
「まて！なつみは俺専用肉便器だっ！」
ちゅぽ
もごぉ
ぶぴぴぴ

ギロロ！
やっやめてぇ！
いっ痛い！
血が出てるよっ！
「なつみの処女は
誰にも渡さん!!」
ズボッ
ズブッ
ズブッ

「どうだ！たっぷり中出しして孕ましてやるぜ！」
いっいやあ！
中に出さないで！
妊娠しちゃうっ！
ビュルルッ
ビュビュビュ

「まったくはしたないメス豚だ！」
「どこでもしょんべんしやがる！」
「コイツはまだお仕置きが必要だな！」
だってトイレに行かせてもらえないから・・・

「マ◯コはガバガバだがアナルは締まるな！」
「初めてだから当たり前か、フッ」
ギロロ
ズブズブ
ギロロのおちんちん
すごい！イイ！
お腹の中で暴れて
私、変になっちゃう！
ああんらめえぇ~ん！！

あまり混んでいない電車に２人の男が

乗り込む。

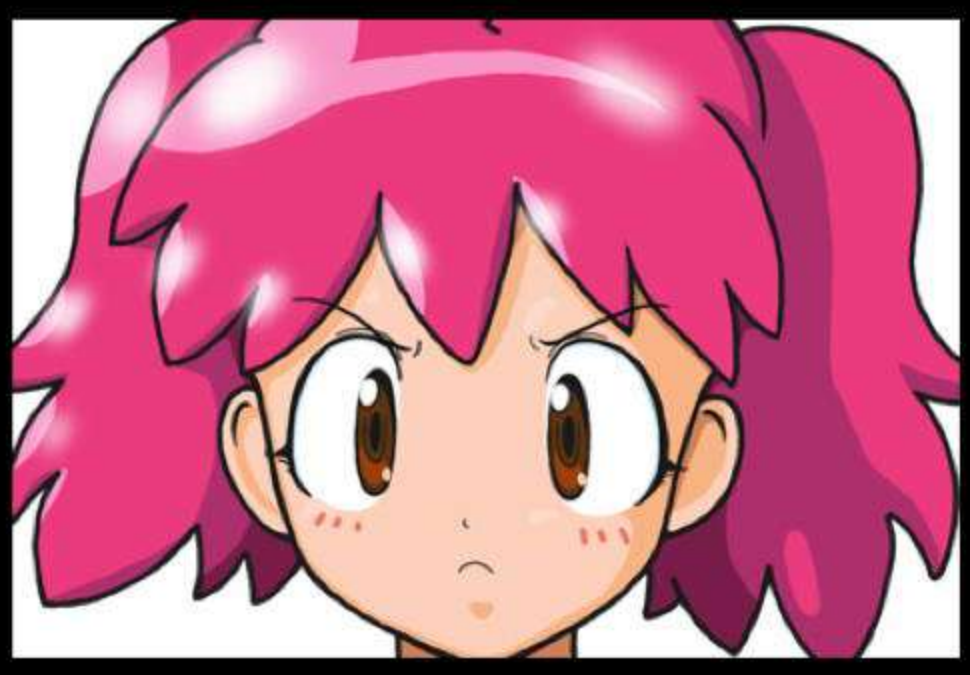
一人は金髪のヤクザ風の日本人男性。

もう一人はスキンヘッドの巨漢の黒人男性。

乗客を睨みつけ、

人のいなくなった７人分の席を横柄に座る。

「あなた達！やめなさいよ！」



「ククク、女に怒られるのは久しぶりだな・・」「恥ずかしくないの？！」

「お嬢ちゃん、俺は上海から帰って来て疲れているんだ。」「関係ないでしょ！」

「・・・・」「すぐにどきなさいよ！」「俺を怒らせない方がいい」

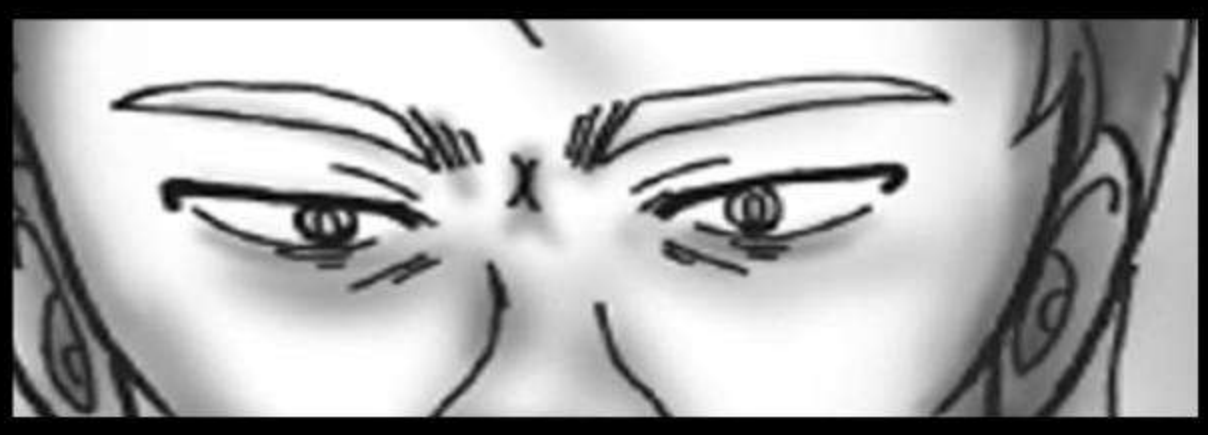
黒人男性の手が少女の腕を素早く掴む

「いっ痛い！」

少女は腕を解こうとするが男の手は

離れない。それどころかぎりぎりと

手に力を入れているようだ。



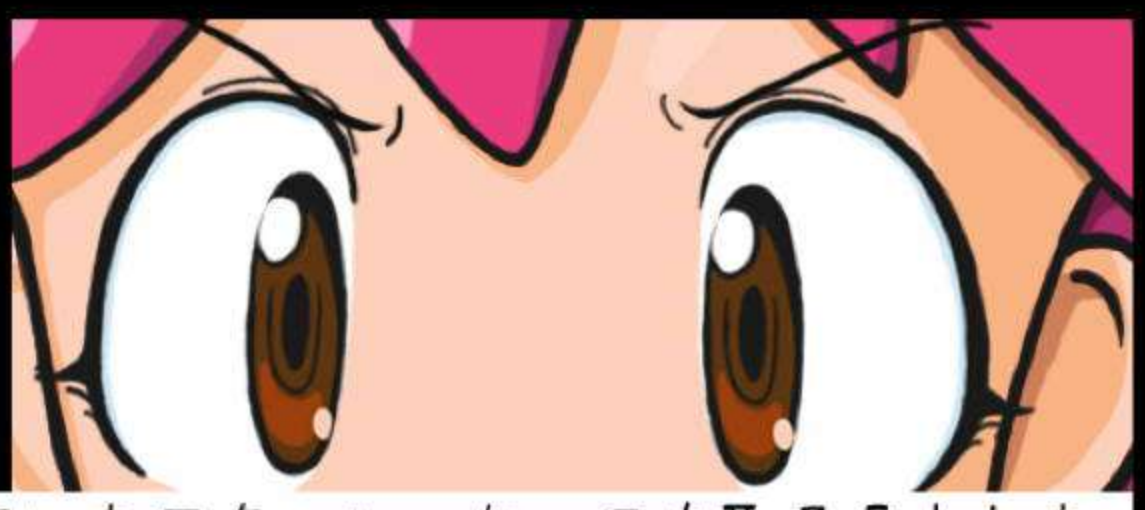
「放してやれ」

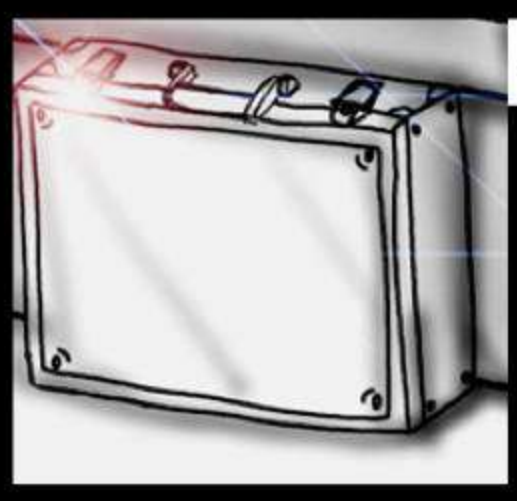
金髪の男の言葉に黒人は手を放す。

「どうしても動かないつもり？！」

少女は気丈にもまだ男達を

席から立たせるつもりだった。





そして金髪の男の持っていたアタッシュケースを取ろうとした。

「このアマァ！！」

男は激怒し、少女のほおを張り倒す。

ものすごい力だった。少女は勢いで倒れ込む。

数秒、気を失っていたようだ。ガクガクと震え

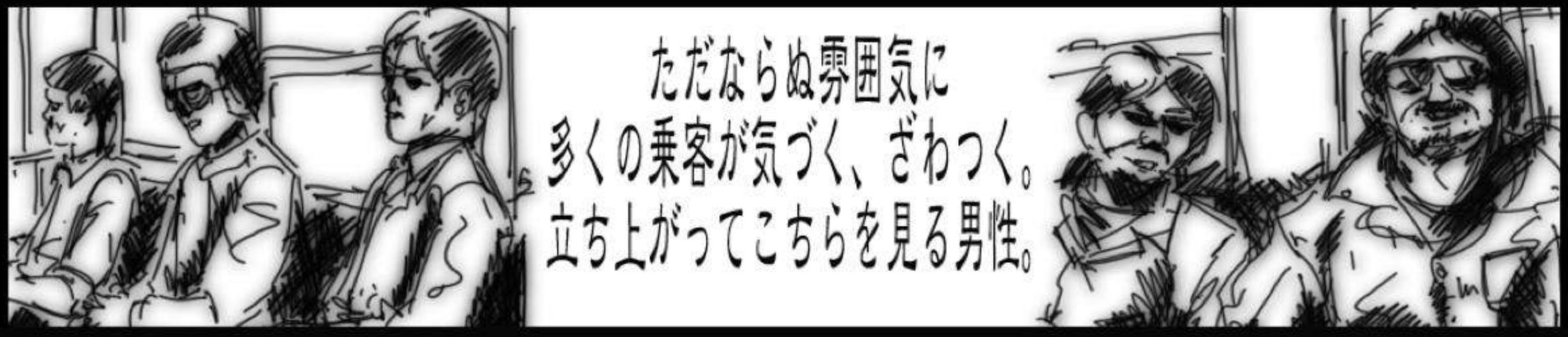
鼻血が出ていることにも気がつかない。

「ムカつくガキだ。俺が特別に調教してやる。」

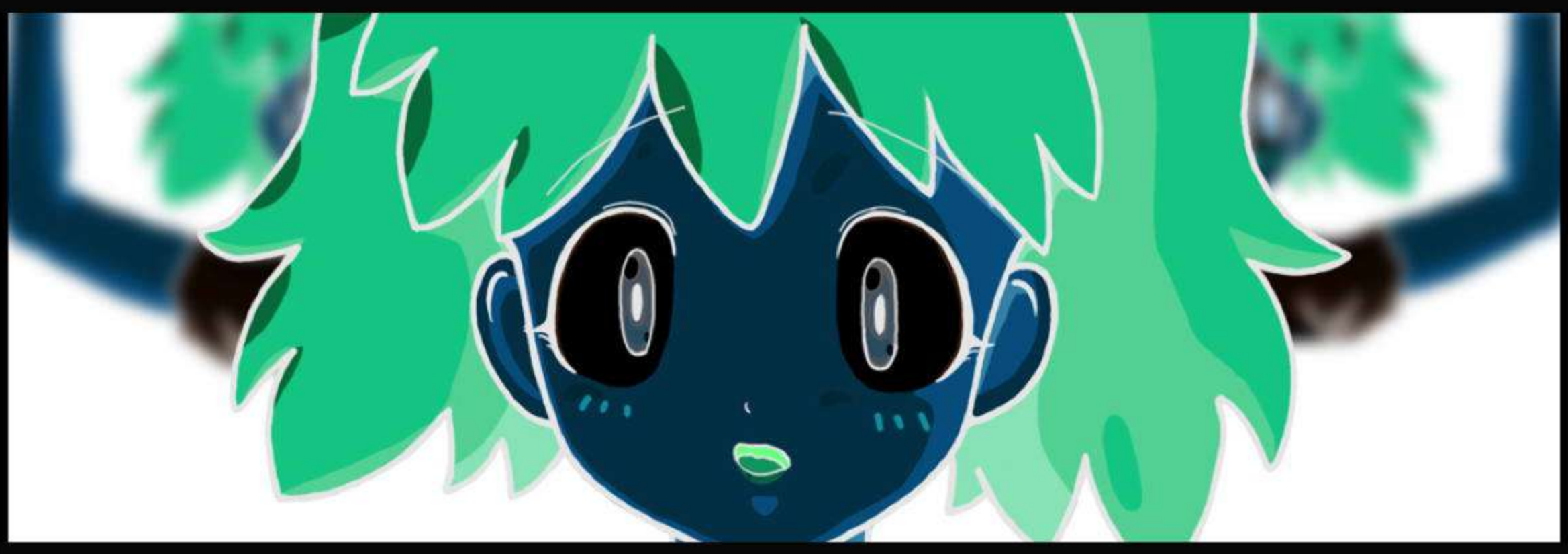
2人の男が席を立ち、少女に近づく・・

金髪の男がアタッシュケースを開けると
注射器とアンプルを取り出した。
少女はその時、自分の身に危険が近づいて来たことを感じた。

「きゃあああ！
助けてえ！
誰かあ！」



「何見てんだ！この野郎っ！」



金髪の男の恫喝に周りの乗客は
震え上がり、俯き、気づかないフリする。
巨漢の男が少女の両手を掴み、立たせる。
「いやっ！放して！いやああ！」
上に向けた注射針から液体が飛び出す。
暴れる少女に顔を近づけ、ドスの効いた声で
「針が折れると死ぬぞ」
「ひっ！」
少女が怯み、一瞬動きが止まった時、
すかさずスカートをたくし上げる。
あらわになる少女の太もも。
金髪の男は少女の足をぐっと掴み、針を差す。
「いっ痛い！」
注射器の中の液体の半分が少女の太ももに入ったとき、
針は抜かれた。
「これぐらいでいいだろ。死んでもらっては困るからな」
「お願い、放して！」
「いい眺めだ。始めるとするか・・」

「効いて来たか。」

効果はすぐに現れた。

「ハア、ハア、ハア・・うっんぐ・・ハア、ハア」

頬がピンクに染まり、じんわりと汗をかく。

目の焦点が定まらなくない、息も荒い。そして・・

ガタッ！

その場にしゃがみ込む。「ああ・・・何で・・」

身体が熱い。皮膚が敏感になり、シャツが触れるだけで感じてしまう。

「うん・・うんくぅ・・」

口がだらし無く開き、涎を垂らし始める。必死に飲み込もうとするがそれさえ出来ない。

「どうだ？我慢出来ないだろ・・」

金髪の男が少女の頬やさしく撫で、耳に触れる。

「ひやぁ！」

途端に少女は悲鳴とも喘ぎ声とも付かない声を出すと・・・

ジョボジョロジョロジョロ・・

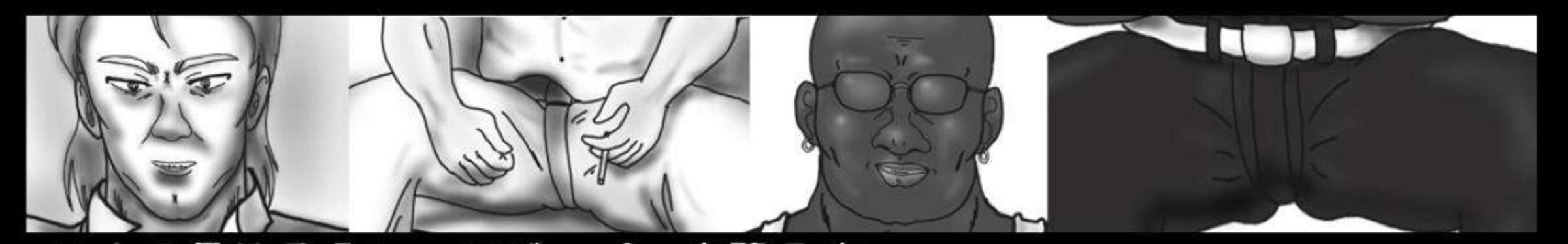
「ニヤリ」

男はスカートを脱がし、
大胆に少女の身体を弄び始めた。

少女のぐっしょり濡れたショーツの中に手をやり、
もう片方の手でネクタイを解く。
「うっはあ！やあ・・やめぇひへぇ！」
シャツのボタンを外しブラのホックを外す。
「ああ、あふ、はあん！うくぅ」
少女をすでに抵抗出来なくなっていた。
巨漢の男がシャツを脱がし、
金髪の男は少女の身体を弄る。
車両の中では
少女の喘ぎ声が響く。

そして少女は
全裸になった。

「よし、じゃあコイツをきれいにしてもらおうか？」



二人の男はそういってジッパーを降ろす。
周りの乗客の視線を感じながらも、抵抗出来ずに全裸になった少女。
虚ろな瞳が二人の男が差し出した肉棒を捉える。鼻に付く強烈なニオイ。

普段の少女ならとても耐えられなであろう。
顔を背けたくなったのは一瞬で、そのニオイに少女の身体は敏感に反応した。
女、牝としての本能だろか。両手で男の肉棒を掴むと
愛おしそうにしゃぶり始めたのだ。

「ヒヒヒ、こいつは嬉しいね！
かなり臭いはずだけどなあ！」
「うん・・ちゅうんくぅ！ちゅぶ・・うんん」
「もっと口の奥までくわえろよ」
「うっ・・んんんんくぅうう」
「ヒヒヒ！いいぞ、その調子・・おお、やっやべ」

少女の激しいしゃぶりっぷりに男の肉棒も・・・「おおおっんんん！」

どくん！どくん！どびゅる！
びゅっびゅる！
金髪の男が果てると黒人も
「ふんぬううんん！」
どくん！どくん！どぴゅううう！
びゅ、どろ～
少女の顔に白粘液をぶちまけた。

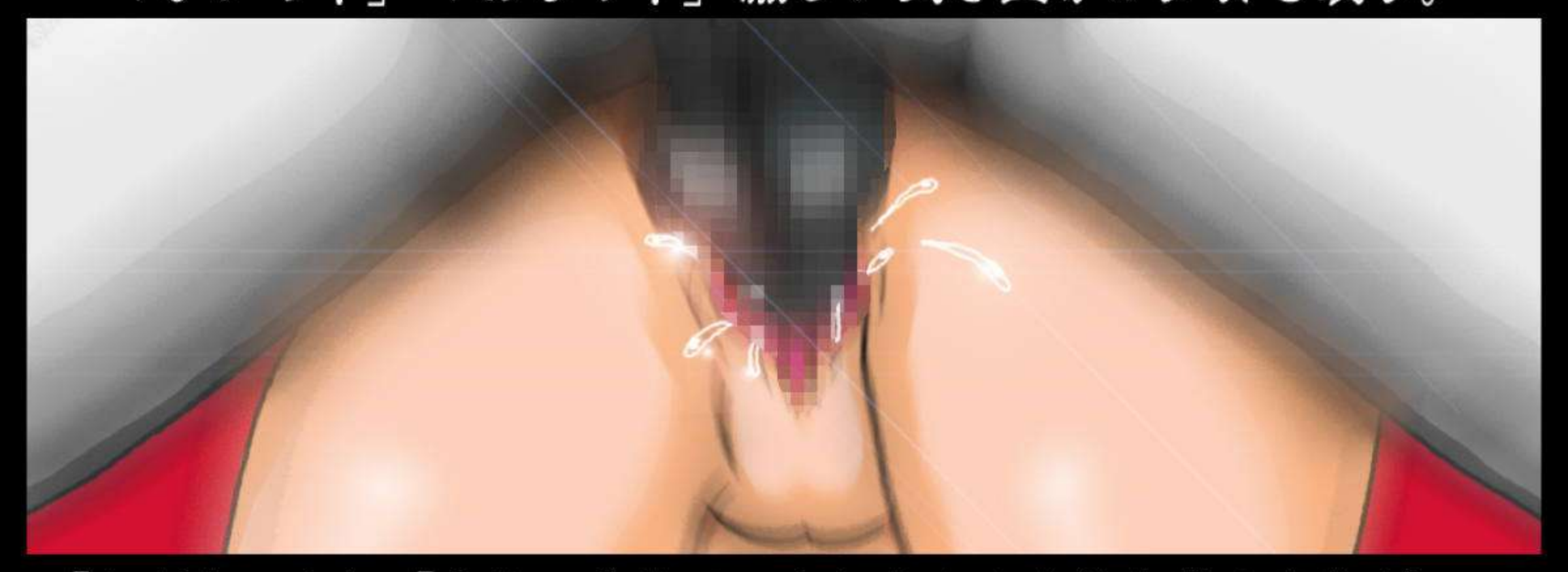
「はあ、はふ・・」
生臭い粘液を少女はおいしそうに舐め始めた・・・

「おらおら、これからが本番だぜ」
「ケツを出しな」

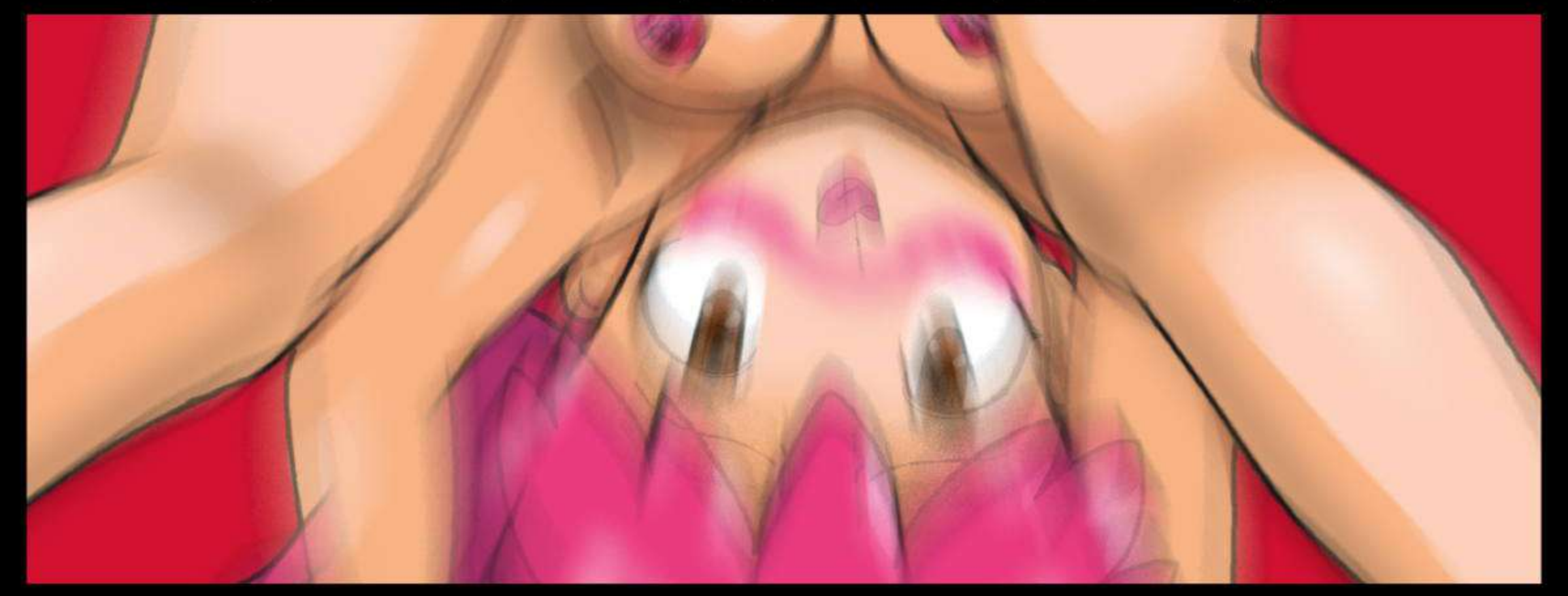
「あ・・ああうっ。」
喘ぎとも呻きとも
つかない声を
出しながら
そのやわらかな
お尻を差し出した。

身も知らぬ嫌悪すべき男に処女を奪われようとしている。
そのことを頭の中では感じても、身体は男の肉棒を欲している。
「ひひひ、こりゃすごい。準備万端だな」

「ひいっ！」「おらっ！」激しい突き上げが少女を襲う。



「あがあっ！」「やめっやめてっ！」少女の身体と男の身体が
当たる度にぱん！ぱん！と激しい肉と肉がぶつかる音が車内に響く。
少女の秘部からは女の蜜が溢れ、飛び散る。「はひいっ！」
「ああっ！らめええ！わたひ、変になっちゃううんん！」



シートから崩れ落ちても男の突きは続く。
「あひん！」「うああ！ひはああ！」
「ふう、どうだ？気持ちイイか？」

「ひぎゃあっ、きっ気持ひいいですうっ！」
そして男が力一杯少女と密着し、
「うっ、ふんぬっ！」少女の中に精液をぶちまける。
「はああ！ひあああ！やへぇああ！」

射精に合わせ、
少女はひくつき、
言葉にならない
喘ぎ声を発する。

少女がしゃがみ込むと穴から白唾液が溢れ出す。
「おらおら！まだ終わっちゃいねーぜ！」

「よし今度はお前が動けよ」
「みなさんによく見えるようにな」

少女はゆっくりと腰を動かす。「うっうふん、うあん。くふっう」
「おっと忘れてた」

「おっと忘れてた」
「ほら、こっちの穴を
くれてやる」
「・・え？」
「ああ！やめて！」
「いまさらやめても
無いもんだ」
「ひひひ！」

「いぎぃい！」「あがあっ！」「やめへええ！」

メリメリメリ
ずぶずぶずぶ

ズン！ズン！ズン！ズボ！ズブ！ズブニュ！

「はああん！いひい！」

「ふふふ、さすがに２本は辛いか？」

「やめへえ！ひぎゃああ！」

「たっぷり出してやるぜ！」

それからどのくらいの時間が経ったでしょうか
私は穴という穴に肉棒を突っ込まれ、

体内に射精され、お腹の中は精液でいっぱいになり、
男達の性欲を満たすだけの

肉便器になっていました。

身体だけでなく心も男達の肉棒をしゃぶることしか考えられなくなりました。

びゅっびゅる

こぽっごぽっ

「じゃあな！今度合う時はもっとお淑やかにな！ははは」

「あひゅう・・も、もっひょ、
ちんぽくだひゃい・・わらひに、
ちんぽくだひゃいいぃ・・」

終わり。

「少女鬼畜調教列車」
その正義感が災いし、男の怒りを買った少女は
強力な催淫剤を打たれ乗客の目の前調教される。
抵抗むなしく肉便器に成り下がる少女
牝と化した少女は肉棒を貪り、尻を突き出す。
最後は肉穴から無様に精液を垂れ流す。
ジョボジョロジョロジョロ・・・
「ニヤリ」
「このアマァ!!」
夏皇華
ズン!ズン!ズン!ズボ!ズブ!ズブニュ!